



大阪大学山岳会 会報

No.24

2022年8月

発行 大阪大学山岳会

〒562-0031 箕面市小野原東4-19-45

大野義照方

百名山完登 —— 新人時代から60年間の足跡 ——

会長 大野義照

昨年8月に燧ヶ岳に登った。コロナ禍の中、公共交通機関を避け、大阪から車で七入山荘へ行き、翌朝御池登山口から山頂、見晴新道を尾瀬ヶ原に下り弥四郎小屋泊、翌日は燧裏林道を経て御池に戻った。百名山百座目の登頂である。1座目は1967年5月に新人3名（故渡部氏、細川氏、大野）が岡久氏、大島氏（OB）に連れられて登った大峰山で、55年かけて百座を登ったことになる。なお、山岳会では岡久氏と井上氏がそれぞれ2001年、2002年に百座完登している（会報No.4）。

1970年の第4次P29遠征隊に参加した。カトマンズ（標高1400m）から車で数時間のトリシリバザール（640m）がキャラバンの出発地である。ベースキャンプ（4000m）まで21日間歩いた。出発地が亜熱帯で、標高が上がるごとに温帯、亜寒帯と移り、それに応じて植生が変わり、住民もネパール人からチベット人へとかわる。民家の材料は木材から石材に変わり、民家の形態が変わっていく。キャラバン中このような住居の変化を調べた。当時は文化人類学的な情報も少なく、調査結果は建築関係の協会誌に6回にわけて掲載され、NHK教育TVでも報告した。この遠征隊でキャラバンの面白さを知り、以来、未知の土地へ行けば、当地を代表する山に登るようになった。創立75周年記念事業としてグレイトヒマラヤ踏破計画が上がっているが、登山だけでなく高山の麓に行くトレッキングも魅力がある。



百名山に興味を持ったのは、各支部（九州、中四国、近畿、北陸、中部、関東、東北、北海道）持ち回りで開催される学会の大会に参加し、開催地を代表する山に登ろうとしてもガイドブックがなく、代わりに深田久弥著「日本百名山」を手にしたからである。

30代は公私とも忙しく近郊の山に家族で出かける程度であった。40才からは百名山を意識して出張の折に百名山を年に1、2座登った。ただ、日程に余裕がないので台風の中でも登った。トムラウシでは新得町に向かう十勝峠で倒木のため通行止めにあい、安達太良山では暴風雨で全く視界のない中を登頂した。

1970年のP29の遠征の後、1978年の夏から梅の木寮にOB・OGが集まるようになった。白馬集会の始まりである。梅の木寮は1962年に建設された。当時、林道はなく、登山道をボッカして建築資材や備品が運ばれた。部員は荷揚げに参加した。私は1963年入部で、1年先輩の畑中氏にはこのストーブはおれが担ぎ上げた。君らは何もしてないとぼやかされた。新人の冬合宿はこの小屋をベースにして行われ、OBも参加した。天気の良い日には天狗原で雪山訓練を行い、仕上げに小蓮華へ登った。1996年冬の大雪で小屋は傾き'99年秋に解体撤去され、跡地は自然に返された。今

は林道から小屋迄の道も消えている。75周年記念行事の一環として小屋跡を訪ねてみたいものだ。

1996年の夏からは場所を対岳館に変えて白馬集会は続いている。1999年8月には山岳会創立50周年を記念する白馬集会所が開かれた。会員と家族の36名が集まり、50周年記念碑の除幕式を行った。2日目は雨飾山他4つのコースに分かれて山歩きを楽しんだ。私は登っていない雨飾山コースを選び、近氏、二木氏、米澤氏、故牧野氏、田中氏、石原氏と登った。雨飾山は'49年4月に故徳永氏、故大島氏が東南稜から登頂されている。これが山岳会として初めての山行である(時報No.1)。白馬集会所への参加の前後で1座は登るように心掛けた。

55歳からは健康のためにもと平均年3座と登山回数を増やした。定年(63歳)の後はさらに回数が増え10座登った年もある。64歳から77歳までに登った山は58座で、東京から日帰り登れる山(13座)は定年後の東京出張の時に登っている。

出張の前後に登った山が39座、白馬集会所の行き帰りに登った山が13座、自宅から家族と出かけた山が46座、計98座。残りの2座は山岳部で登った21座のうちの黒部五郎岳と間ノ岳の2座を加えて100座としたい。

100座のうち山岳部時代を含めて複数回の登った山は38座、回数の多い山は定着合宿中に何度も登った立山、劔岳を除いて、白馬岳と富士山である。

白馬岳は山岳部で2回、白馬集会所の前に1回、家族で縦走の2回(五竜岳と朝日岳)と2014年5月の主稜からの登頂の6回である。主稜は明神氏、井上氏と登った(会報No.4)。前年は大雪のため主稜の途中で1泊し翌日撤退しただけに感慨深かった。この主稜は1950年1月に故徳永氏、故家田氏、故大島氏が厳冬期初登攀されている(時報No.1)。

富士山には4回登っている。初回は1965年11月の3年の秋合宿、2回目は1994年6月に田中氏と5合目から吉田ルートを登った。50歳を記念してヨーロッパ出張中の8月に登るモンブラン(4810m)登山にそなえての高所順応のためである。1999年6月には55歳のマッターホルン(4478m)登山にそなえ、5合目の佐藤小屋から登った。この時は東京から野田氏、石原氏、井上氏に同行していただいた。4回目は同年7月初旬に妻と富士宮ルートを登っている。7月下旬には山岳部恒例週末の近郊のゲレンデ(道場・不動岩)の岩登り(現役参加者:リーダー加門氏、佐田氏、高沢氏)に登山靴で参加し、岩登りの感触を思い出した。マッターホルンは休暇をとって出かけている。モンブランもマッターホルンも天気に恵まれ、一度のトライで登頂できた。マッターホルン登頂の翌々日には妻とライトホルン(4164m)に登っている。

話が前後するが、モンブラン登頂の前年の1993年11月にはケニヤ山レナナピーク(4985m)に出かけている。JICAからナイロビにあるジョモケニヤッタ農工大学の研究・教育支援に2か月間派遣されていた。その土日の休みの初日、現地ツアーの1日目の行程を省略し、途中からツアーに参加、一気にShipton Camp(4200m)まで登り、高山病を発症、頭痛、食欲なし。翌朝も頭痛は納まらなかった。登山は残念ながら出発時に風雨が強くなり中止になった。75周年記念行事としてキリマンジャロ(5895m)登山の計画もあるが、登頂の可能性は高所順応の如何によること大である。

最後に日本アルプス以外で印象に残る山を上げると、ウトロ側から登って羅臼に下りた羅臼岳(雪渓、お花畑、登山者がいない=熊が怖い長距離コース)、溪谷の美しい大杉谷からの大台ヶ原、ミヤマキリシマの咲く九重連山、強雨でデジタルカメラを潰した石楠花と屋久杉の宮之浦岳である。

山岳部の活動状況

2021年度回顧

山岳部 前主将 大澤 駆

2020年度はコロナウイルスが世界全体で流行

し、山岳部でも活動を自粛しなければいけない年でした。2021年度の始めも大学の活動基準によりWallが使えず、部の活動が止まり個人で活動が続けていく期間がありました。6月になるとWallでの活動も可能となりましたが、活動が再

開かれてからは部活としてはどのようにしてコロナと付き合っ活動していくのか、どのようにコロナの自粛で低下した部活のモチベーションを向上させていくのかが課題でした。

コロナ対策については前年度の対応を引き継いで、Wallでの人数制限やマスク、手洗い徹底を行い、部会などはWallに来られない部員に対応してオンラインで行うなどしました。こうした対策と部員の協力もあって、山岳部内の活動や部員でコロナ陽性者を出すことなく活動することができました。また、その中でもコロナ前ぐらいまでに活動の活気を取り戻すために、月にWallで課題を更新するマンスリーを先輩方にセットをお願いしたり、前年度まではWall使用の予約のために使っていた予約システムを用いて、誰がいつWallを使用するのかわかりさせたりすることをしました。これにより、以前より問題としてあったWallに人がいるかわからずWallに来る機会が減ってしまうという下級生のモチベーション向上につながりました。

また、新人勧誘（新勧）では4月から十分に行えず6月あたりから少しずつ行い、夏休み期間も新勧を行いました。ただ、そのおかげで通年よりWallだけでなく外ジムでの新勧を多く開催することができ、また、TwitterやInstagramをはじめとするSNSを通して連絡を頻繁に行うことで、新勧を本格的に行った約3か月間でより多くの新生に新歓に来てもらうことができました。2021年度はWithコロナの中で評価できる面もありましたが、やはり一方で課題も見つかった年でもありました。

始めに、2020年以降のコロナ禍に入学した後輩たちのモチベーションが低いという点です。これは阪大山岳部だけでなく他の部活や他大学の山岳部でも同様な傾向にあると聞きました。コロナで活動が自粛になりがちだった時期と1年生、2年生という入部してまだモチベーションが高く、時間的に余裕のある時期が重なってしまったことが原因と考えられ、同情する点もありますが、活動が戻りつつある現在、やはり部として活動していくためにこうした下級生の活動への積極的な参加は重要であると考えます。現在、その対策として毎週月曜日を練習日として決め、Wallで下級生中心に活動する日を決めて活動しています。現在は、その日の内容は具体的に決めず参加することを目標としていますが、今後は主将を筆

頭に内容のある日にしていき、モチベーション向上につながれば良いと思います。

次に、新勧などを通して新入生などと話している、山岳部の活動、実態が外部に伝えられていないという点です。よく新入生から聞く話で、「山岳部」という名前から活動が厳しいのではないのかや、活動が登山だけで活動に自由度がないのではないのかというのがありました。今年度から練習日を設けましたが、ほかの部活に比べ強制力は強くなくボルダリングなど活動の自由度があるように思います。僕はこれが十分に発信されていないことが課題ではないかと思っています。TwitterやInstagramなどSNSを用いて新入生とやり取りはしていますが、他のサークル、部活に比べて発信力が弱いように思います。そのために、今年度から幹部として広報の役職を設けました。今までは主将などがブログなどの発信を兼業していたのを、ブログ、SNS発信を専門に仕事をすることで発信の頻度を上げていきたいと思っています。

昨年度から阪大ではボルダリングサークルができました。これにより、山岳部以外でもボルダリングで活動ができるようになったので、今年度以降はただ活動していくだけでなく山岳部としてのアイデンティティを確立していくことが重要であると思います。その一助として、モチベーション向上や情報発信はとても重要だと思います。Wallの改修も合わせて今年度は新しい山岳部を作ってほしいと思います。

2022年度活動方針

山岳部 主将 石井洋司

本年度、主将を務めさせていただく、外国語学部外国語学科2年の石井洋司です。山岳会の方々には、いつも様々な面でお力添えいただき、深く感謝申し上げます。

さて、本年度ですが、ウィズコロナの生活が定着しつつありますが、体育会でも、活動基準が緩和されまして、去年以上に活発に活動していきたいと考えております。

具体的には、ボルダリングだけでなく、登山、リードクライミング、沢登りそして、ロッククライミングなどを行っていく予定です。

また、主将として、多岐に渡る活動を行うため、技術や知識を身につけることも必要だと思い、中

之島山岳部のお力添えのもと、リードクライミングの技術を学びました。また、今後は、登山研修会、トライアスロンの大会への参加をする予定です。様々な面で、部を引っ張って行きたいと思

ます。

最後となりましたが、今後とも、山岳部の発展のため、山岳会の方々のお力添えいただきたくお願い申し上げます。

山行報告 (2021.4 ~ 2022.3)

八ヶ岳縦走 (蓼科山から観音平)

【期間】2021.7.22 ~ 7.24

【参加者】石原、科野

【記録】

終点の観音平駐車場に入山前夜に集合、そこで車中泊して翌早朝に蓼科山の七合目登山口に移動。今回は軽量化のため朝夕食事付きの小屋泊の計画。コロナ禍のために休業中や人数制限をしている小屋が多く一度稜線から降りるコース取りとなった。

7/22 登山口 5:10 - 蓼科山荘 6:35 - 蓼科山 8:04 - 天翔寺原 10:41 - 北横岳 12:41 - ロープウェイ山頂駅 13:44 - 麦草ヒュッテ 16:10

少し歩いて蓼科山荘(将軍平)で朝食をとってから蓼科山山頂へ。みごとな快晴。これから行く南八ヶ岳もくっきり見えるが結構遠い。天翔寺原に下りて北横岳への上り返しで消耗し、ロープウェイの山頂駅で大休止。雲行きが怪しくなってきたことを幸いに、縞枯山と茶白山を巻いて麦草ヒュッテに直行。小屋に入ると同時に猛烈な夕立。小屋ではお風呂にトンカツ、天国であった。

7/23 麦草ヒュッテ 4:09 - 高見石小屋 5:45 - 中山(展望台) 7:38 - 東天狗岳 9:51 - 根石岳山荘 10:38 - 硫黄岳 13:03 - 赤岳鉱泉 14:35 - 行者小屋 15:49

今日は行程が長く4時出発のためお弁当を作ってもらい高見石小屋で朝食。途中の丸山への上りはみごとな苔の絨毯が延々と続き、圧倒されつつ、癒されつつ、素晴らしいところ。中山の展望台では今日も快晴。短めのピッチで順調に進み根石岳小屋で一服。このころからガスが出だし硫黄岳では雲に覆われ雨粒も。雷が怖いので地蔵の頭から行者小屋に下りる計画を赤岳鉱泉経由のルートに変更。途中は小雨程度だったが主稜線のほうではゴロゴロ鳴っていた。

7/24 行者小屋 5:13 - 赤岳 7:12 - キレット小屋 9:03 - 権現小屋 11:23 - 青年小屋 12:52 -

観音平 16:09

小屋周辺は晴れているが上るにつれてガスの中へ。岩場の渋滞はほぼなし。赤岳山頂ではガスの切れ間から赤岳鉱泉方面が少し見える程度。このあと終日展望なく観音平まで1400mほどの下り。浮石だらけのルンゼも権現岳のはしごも幸い時間待ちなく通過。計画に入っていた権現岳や編笠山には目もくれずひたすら下る。

八ヶ岳 編笠山 権現岳

【期間】2021.8.27 ~ 8.28

【参加者】横尾、出雲路

【記録】

2021年白馬集会は前年同様コロナ禍のため中止となったが、有志が28日に対岳館に泊まるとの事なのでそれに合せて山行を企画した。横尾さんは所用のため白馬に向わず帰京された。

8/27 9:05 小淵沢CCそば(1140m) - 11:09 ~ 11:20 観音平(1560m) - 13:43 ~ 13:50 押手川分岐 - 15:52 ~ 16:04 編笠山山頂(2524m) - 16:45 青年小屋(2370m)

8:53 小淵沢駅着、横尾さんと落ち合い、タクシーにて小淵沢ゴルフ場そばまで。

ここから観音平までは林道と自動車道。蒸し暑い。観音平から登山道。カラ松林が続く。雲海(1880m)で展望が開け、押手川分岐(2050m)で青年小屋へ向う道と分れ編笠山に向かう。標高2300m位からは岩塊の重なる、登るに従い傾斜がきつくなる直登道で、大汗をかいた。頂上直下で森林限界超える。編笠と権現の鞍部に位置する青年小屋、手前数百mは溶岩塊の露出した岩原になっており、岩を越えても越えても目前の小屋に辿り着かなかったが、小屋は快適な一夜であった。

8/28 5:25 青年小屋 - 7:00 東ギボシ - 7:15 権現小屋 - 7:25 ~ 7:35 権現岳(2715m) - 8:34 三ツ頭(2580m) - 9:14 ~ 9:20 前三ツ頭 - 11:40 天女山(1529m) - 12:42 甲斐大泉駅

4:40 起床。夜降水があった様子で寒い。風なし。西ギボシ直下、樹林帯を過ぎると鎖場で、まもなく東の下も鎖。東ギボシからは傾斜の少ない吊り尾根で、赤岳、阿弥陀岳が大きく聳える。今年、権現小屋は休業。権現岳頂上は岩峰、落ち着けるスペースがない。続々と青年小屋方面から登ってくる登山者が見えた。快晴で眺望が素晴らしい。暑い。八ヶ岳連山のみならず、甲斐駒、千丈、大きく富士、御岳、乗鞍、北アルプス南部まで明瞭に見渡せた。権現を下るとすぐ樹林に入る。前三ツ頭からの下り、最初急降下でそのあと延々と続く緩傾斜道。天女山で、横尾さんと別れる。横尾さんは自然歩道を辿って清里方面に、出雲路はさらに延々と続く別荘地を貫く一直線の自動車道を甲斐大泉駅に下った。(記:出雲路)

東鎌尾根から槍岳縦走 (テント泊)

【期 間】 2021.9.23 ~ 9.25

【参加者】 科野、石原

【記 録】

9/23 晴後曇り (昼から西風)

一の沢登山口 7:27 - 12:26 常念乗越 12:58 - 15:28 東天井岳コル 15:36 - 16:42 大天荘テント地

初日の午前中は、疲れが溜まっていないので、快調に歩ける。胸突き八丁の高巻が終わるころから息が切れ始めまる。肩で息をしながら、やっとのことで常念小屋に辿り着く。昼飯を兼ねた長い休憩で、ゆっくり休む。横通岳のトラバースまで、ジグザクの坂道を頑張って何とか登る。そこからは、先に進む以外の選択肢は無いと自分に云い聞かせて、限り無く続きそうな緩傾斜の道を登り続ける事、4時間余でテント地に到着出来た。

9/24 晴後曇り

大天荘テント地 6:58 - 7:41 大天井ヒュッテ 7:58 - 11:05 ヒュッテ西岳 11:43 - 12:12 水俣乗越 15:40 殺生ヒュッテ・テント地

朝焼けの赤い槍穂の稜線に感激する。柔らかくなった秋の朝の日差しに、赤や黄色の紅葉と這松の緑の配色の妙を楽しみながら歩く。西岳ヒュッテ辺りから眺める槍は、秋の錦を纏ったようで絵のようだ。水俣乗越からの東鎌尾根の登りにかかると心配していた昨日の疲れが出始めた。いつの間にか、辺りはガスに巻かれ、視界も利かない。黙々と登っていると、背後に目線を感じる。振り向いて目を上げると、岩の上に座る猿に見下され



槍ヶ岳・北鎌尾根

ている。ヒュッテ大槍から先の北鎌尾根は、先日の地震被害で通行止め。止む無く、喜んで殺生ヒュッテ横にテントを張る。

9/25 快晴後晴

殺生ヒュッテテント地 6:53 - 7:46 槍ヶ岳山荘 (槍アタック 40分) 9:13 - 12:05 槍平小屋 12:31 - 16:28 新穂高温泉

朝、褐色に輝く槍の穂先が、澄み切った群青の天を衝く。槍の肩にザックを置いて、槍岳へ往復する。若い頃、夏の千丈沢合宿に何度か参加して、北鎌尾根の岩登りの帰路に、このルートを何度も下った事などが脳裏に蘇る。槍の穂先に東西南北4方向から登るルートの中で唯一残っていた東鎌尾根も、今回の山行でトレース出来た。パートナーの科野さんに大感謝です。縦走3日目の疲れた体に鞭打って、槍から新穂高温泉まで、気の遠くなるほどの距離をひたすら歩いた。(記:石原)

白山 大白水谷から御前峰

【期 間】 2021.10.1 ~ 10.3

【参加者】 奥山、草尾、東條、大倉、大澤 (現役)

【記 録】

10/1 P.M.8 千里中央、P.M.9 草津サービスエリアで合流。平瀬道登山口には大きな駐車場があり、ここにテントを張った。

10/2 天候 快晴、暖かい

大白水谷入渓点7:00～転法輪谷が別れて間も無く3、8、20m 滝。8m 滝右を1ピッチ、20m 滝左手の壁を1ピッチロープを出した。20m 滝はホールドも細かく高度感あり。続く8m 滝は右手から1ピッチ。3、15m 滝はまとめて右手の斜面から高巻き1ピッチ。しばらく進んで出てくる8m 滝は右から滝に沿って高巻く。高度感やあるがロープなし。あとは二俣まで難所なし。少し早いが二股手前に良いテントサイトを見つけたため、ここで泊とする14:00。流木を集めて焚火。転法輪谷から別れてから滝が連続するところがこの沢の核心部で、直登、高巻きなどの route finding とロープが必要であった。

総じて谷は開けていて明るい。水は朝は冷たいが日中はそれほどでも無く、終日快晴の快適な沢登り。水は僅かに白っぽく上流の石には湯の花も見られ、魚影はなかった。コケも少なくゴム底の沢靴が快適。

10/3 天候 快晴 暖かい

二股発7:00～右俣に入って適当なところで左手のがれを詰めて登山道に合流して廻行終了10:10～荷物をデポして登山道から室堂～御前峰アタック12:10～あとはひたすら平瀬道を降る～平瀬道登山口16:00。

右俣は小さな滝のみで快適。徐々に谷は開けて源頭部の紅葉が美しい。室堂は紅葉の最盛期で、10月から緊急事態宣言が解除されたこともあって多くの登山者で賑わっていた。

共同装備:ロープ9mm×60m2本、コンロ3、ガス3、テント2(4人用、2人用) (記:奥山)

石老山 (セキロウザン)

【期 間】2021.11.14

【参加者】酒井、米澤、前沢、横尾、石原、出雲路

【記 録】

9:30 JR中央本線相模湖駅集合。9:38 発三カ木行バスにて出発。晴。9:46 プレジャーフォレスト前で下車。通常の顕鏡寺ルートは先年の台風による荒廃のため閉鎖との事で新しく造られた大明神ルートから登る。11:20～12:15 大明神展望台(標高551m)にて昼食。快晴微風。13:23～13:36 石老山頂(702m)。あちらこちらからハイカーが集まり結構な人出であった。帰りは同じルートを避け、篠原集落に下る。15:11 篠

原集落県道出合。ここからプレジャーフォレスト前バス停まで県道を歩く。16:30 頃相模湖駅到着。駅前で打上げの一杯を飲み解散。

(記:出雲路)

屋久島 宮之浦岳

【期 間】2022.2.27～2.28

【参加者】石原、上松、大西

【記 録】

2/27 荒川登山口08:20 - 縄文杉13:00 - 新高塚小屋14:50

前日に石原さん、大西はフェリーで鹿児島から、上松さんは飛行機で伊丹から屋久島入り。事前に観光局に確認したところ、3/1からは荒川登山口は一切マイカー立ち入り禁止ということ。当初は高塚小屋から宮之浦岳アタックをする2泊3日を予定していたが、天候も考え、1泊2日で往復することとした。この為、高塚小屋の一段上の新高塚小屋を宿泊目的地とした。

荒川登山口から大株歩道入口まではトロッコ軌道を歩く。約2時間半。ここからが登山道となり、ウィルソン株、大王杉などを通過し、縄文杉は高塚小屋直下にあった。杉の根元が荒れているということで遠くからしか見れないのが残念。縄文杉あたりから雪が残り始め、新高塚小屋ではそれなりの残雪となった。テントは持参していたが、小屋はよく整備されていて快適であった。前日安房で買付した食材の鍋を楽しんだ。

2/28 新高塚小屋06:00 - 宮之浦岳09:00 - 新高塚小屋12:00 - 荒川登山口17:30

日の出前に懐電行動で、小屋を出発。石原さんはチェーンアイゼンを小屋から装着。1時間ほど



宮之浦岳(右)と翁岳(左)

登ったところで、素晴らしい日の出を見ることができた。永田岳への三叉路の下で、上松さん、大西もアイゼンを装着。登山道の部分のみ残雪が凍っているが、技術的に難しい訳ではない。宮之浦岳からは絶好の展望で、遠く桜島、開聞岳を望むこともできた。

下山は往路と同じ。新高塚小屋で荷物を回収し、再度縄文杉などを楽しみながら下山した。トロッ

コ軌道にでてからは、上松さんがハイペースでリードし、かなりコースタイムを短縮して荒川登山口に戻った。

翌日は屋久島らしい大雨。石原さんと大西は、白谷雲水峡散歩とマイカーで島一周を楽しんだ。山行中は天候に恵まれ、良い思い出となった。

(記：大西)

白馬集会中止も対岳館でプライベート懇親会

白馬集会は新型コロナの感染拡大を受け、2021年も会の行事としては中止ということになりましたが、2020年同様、個人の行事としてこの時期に対岳館に行くことにしている会員が対岳館に集

合することについては個人判断にゆだねることにした。8/28 対岳館宿泊者は以下の通り。

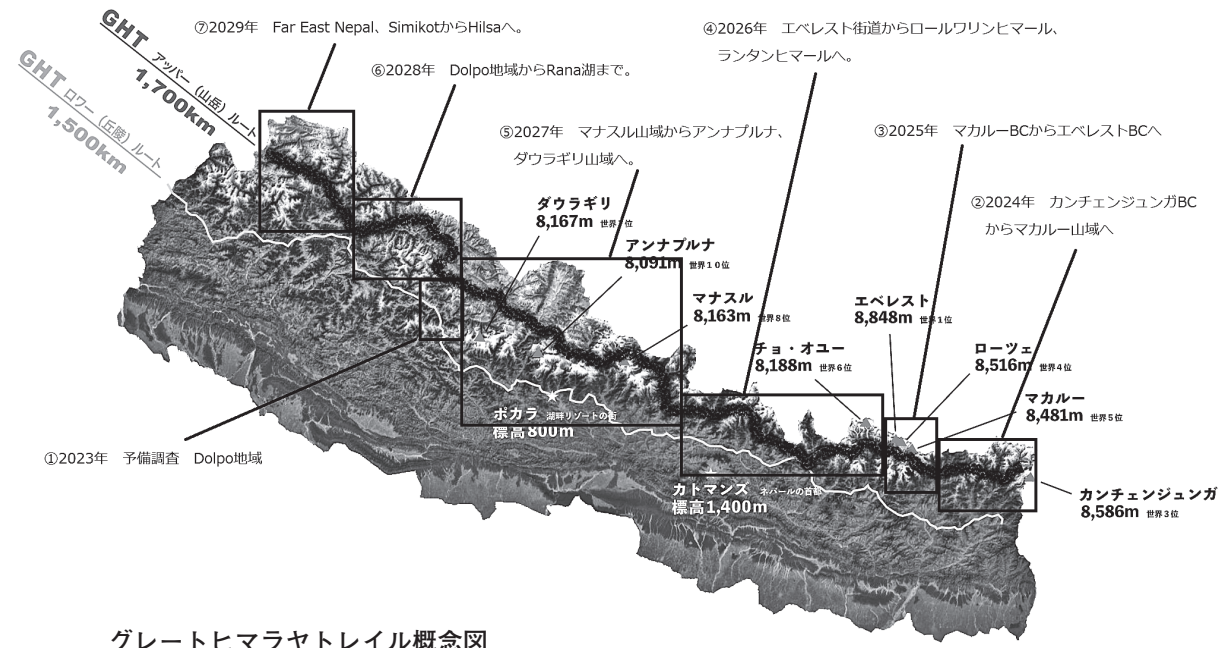
大野義照、豊坂明宏、出雲路敬孝、田中喜樹、山田靖則、石原敏雄、稲垣佳夫、科野昌蔵、上松一雄 (9名)

グレートヒマラヤトレイルの紹介

海外登山研究会 畑 秀信、大西 啓之

総会議案にて報告した75周年記念事業の一環としての海外登山計画のうち、グレートヒマラヤトレイル（以下、GHT、下図参照）について、その紹介をします。

総会議案にて報告した海外登山計画のうち、グレートヒマラヤトレイル（以下、GHT）については、初めて耳にされる方も多いためです、その紹介をします。（下図参照）



グレートヒマラヤトレイル概念図

GHTは、2011年にネパール観光局から1700kmを約157日間かけて踏破する世界最長・最高峰レベルのトレッキングコースとして発表されたものです。最近NHK BSでも取り上げられましたし、日本山岳会でも2020年から調査を開始しています。大阪市大OBである和田城志さんも2012年と2013年の2年にわたり、合計約7か月をかけて踏破されています。

海外登山研究会ではの会員から提案のあった登山計画の討議の中で、このGHTの踏破に興味を持ちました。現在の会の実力からするとGHTアップパールートかなり厳しいものではありますが、参加できる会員も限られたものになるかもしれませんが、下記のような観点から山岳会の活性化にも貢献できると考えますし、GHTロールートも含め、多くの方の参加を募りたいと考えます。

- (1) 数年にわたる活動であることから、2-3年後には現役山岳部員の参加も期待でき、それが現役山岳部の活動の広がりにつながる可能性があること。また、現役山岳部員が参加する場合には、山岳会として支援を頂ければと考えます。
- (2) 1か月以上にわたる山行ではあるものの、6年にわたる山行計画であり、可能な年だけ参加することや一部区間みの参加などの形態も検討することで、山岳会の活性化に寄与できること。
- (3) 大学との連携を行い学術調査のような要素を盛り込むことで、学生への山岳会活動をアピールする可能性があること。

具体的な計画は今後詰めていきますが、GHTアップパールートに関しては現状では下記のように考えております。

- ① 1年目 2023年9-10月：予備調査と足慣らし
現地エージェントやアプリケーションの確認です。まずは実行を優先します。5,000m超の峠越えを経験することで、翌年からの本格山行の予行をするとともに、学術的フィールドワークの対象選定も行います。
- ② 2年目 2024年9-10月：カンチェンジュンガBC往復からマカルー山域まで。
2024年は75周年です。75周年事業の一つとしてGHT踏破を開始したいと考えます。
- ③ 3年目 2025年：マカルーBCからエベレストBCまで。

学生が参加するのであれば、3-4月のプレモンスーンに実施することもあり得ます。6,000m級の峠を3つ超えるGHTで最難関の区間です。一方で、エベレスト街道など一部区間の参加も得やすい部分です。

- ④ 4年目 2026年：ロールワリンヒマールからランタンヒマールへ。

ルクラから2つの峠を越えて、ランタンヒマールまで。参加メンバーや学生の実力がついてくればトレッキングパーミッションでの登山も織り込みたいと考えます。

- ⑤ 5年目 2027年：P29、マナスル山域からアンナプルナ、ダウラギリ山域へ。
- ⑥ 6年目 2028年：Dolpo地域からRara湖まで。
- ⑦ 7年目 2029年：GHTの西端を踏破。

6/7年目の区間はトレッカーも少なくなるものの、山岳少数民族の文化が残る地域であり、学術調査も行いたいと考えます。2029年は80周年の年となります。

本研究会では、このGHTを75周年記念海外登山計画の主軸として考えていますが、本計画については、実施となると、細部の詰め、実施体制の検討、概算費用（全体、各年）の算出が必要であり、今後の検討課題となります。また、GHTロールートについては別途紹介する機会があるかと考えていますが、GHTロールートも含め、ご興味のある方はなんなりと畑、大西までお問合せください。

会員名簿と個人情報保護法案について

現在、会員名簿は2017年12月1日付が最終版で、その後更新されていませんが、この間、個人情報保護法案の施行があり、これまで通りの住所、電話番号、メールアドレス等の個人情報が本人の了承なしに記載された名簿の作成には問題があることがわかりました。理事会での検討で、法案の趣旨を尊重し、名簿の掲載事項について、各会員の了承を得ることになりました。

掲載事項の諾否については、事務局からはがきやメールでの連絡を予定し、その結果をもとに新しい名簿の作成に取りかかる予定です。

名簿は会員相互のコミュニケーションの基礎でもありますので、ご協力をお願いいたします。

(事務局)

会 員 動 静

二木節夫 (工 1954 卒)

令和3年8月16日に満91歳になりました。以前と同じ専業対象者として介護サービスを受けています。足元が若干不自由ですがまだ散歩時杖なしてヨロヨロですが歩いています。健康を維持するためのデイサービスを週2回に増しました。病気になる限りこの生活を続けたいと思っています。

廣瀬貞雄 (工 1961 卒)

元気にしています。仕事は2022年3月31日付けで終了しました。皆さんと一緒にできる間は参加したと考えています。

前澤祐一 (工 1962 卒)

元気にしております。近所を出歩く程度で、平均3千歩/日ぐらいしか歩いておりません。

横尾秀次郎 (工 1964 卒)

神奈川や東京の街や丘を歩いています。浜松から糸魚川迄の横断旅行をと考えています。

高田邦雄 (経 1965 卒)

長年担当してきた会報作成の仕事をやめさせて頂きました。ただ、脚のふらつきはひどくなるばかりで、やりたいこともできません。

播本裕晃 (法 1965 卒)

いよいよ80歳。確実な老化の中でいかに健康でいられるか切実に感じています。

豊坂昭宏 (医 1966 卒)

まだ病院に勤務している。山には最近ご無沙汰である。心は行きたいが、体がついて行かず筋肉の退化は如何ともし難い。誠に残念である。ジムには週2-3回通っているが、筋力アップは至難の業、退化の速度を抑える程度にはなるか。老化には所詮逆らえないというのが今の心境である。

吉川信也 (理 1965 卒)

「悠々自適」を夢見つつ、まだ論文執筆等の残務整理に励んでいます。山行は近くの甲山に登るのがやっとです。

石浜高明 (工 1966 卒)

卓球、テニス、麻雀を楽しんでいます。山は近隣の低山を歩く程度です。

畑中 薫 (医 1969 卒)

精神科医師として入院患者さんの診療を続けていますが、疲れてきたので6月から週3.5日の非

常勤になりました。腫瘍マーカーPIVK-2の軽い上昇が続いていることと心電図の左脚ブロックは気になりますが、週1回の太極拳で体をリセットできてます。余った時間は聖書を勉強しています。

黒田治朗 (医 1969 卒)

今年2月は勤務している介護老健施設で54人の新型コロナの大クラスターが発生し、1ヶ月半大変な思いをしました。現在コロナは下火傾向ですが、充分に対策をして、60才以上の方は4回目ワクチン接種をしましょう。

鹿野信吾 (理 1971 卒)

栃木県野木町に開業し20年、クリニックを息子に譲り、週2回外来を手伝っています。暇になると思っていたら、いろいろやる事が多く忙しく過ごしています。

明神 知 (基 1978 卒)

札幌近郊の円山や藻岩山は何度か登っておりますが、昨夏は樽前山と大雪の黒岳に登り、今年3月には札幌市の最高峰余市岳(1488m)にキロロからスノーシューで登りました。帰りは皆さん山スキーやスノーモビルで、あっという間に人影が無くなり「飛汀場」と呼ばれる大雪原のルートファインディングに少々焦りました。今夏は北海道最高峰の旭岳にフラダンスのカヒコで足腰鍛えた家内と登る予定です。今年度は定年ですが、来年1年は特任で残る予定です。

岡部祐二 (工 1979 卒)

昨年、腰の手術を致しましたので、余り山行はできておりません。冬に馬場島、里山程度、5月に小豆島の拇指岳クライミング程度です。

松尾敬志 (歯 1980 卒)

先日、鳥取の大山に行きました。登山と言うより、山へ入ると言う方がピッタリです。途中で道に迷ったり、ザックを紛失したりで、山の中で1週間過ごしました。体力もさることながら、能力(脳力)の衰えも実感しました。

小松二郎 (工 1982 卒)

毎朝、運動しておりますが、山に行く自信がなかなか持てないのが現状です。

訃 報

細見 一仁 氏

2019年7月16日に亡くなられていたことが対岳館丸山庄司氏からの連絡で分かりました。

1953年理学部卒、その後歯学部に再入学され1957年歯学部卒。卒業後は各地診療所勤務の後、父親が開業されていた細見歯科を継ぐ。

山岳部では当時、部が主力を注いだ後立山（白馬、カクネ里等）に足跡を残された。対岳館の丸山庄司氏の話では、結婚後対岳館にこられ、白馬杓子尾根をご夫婦で登られたとのこと。

岡田 博司 氏

2021年10月19日に亡くなりました。享年86歳。1958年法学部卒。永らく住友信託銀行（現三井住友信託銀行）に勤務された後、日本割引短資（現セントラル短資）に転籍されていた。



1957年山岳部CL、春山合宿（黒部上廊下偵察：烏帽子から赤牛岳を計画したが、天候不良、風邪のまん延で野口五郎まで）、夏山合宿（穂高）、冬山合宿（双六岳－赤牛岳往復）等を計画、実行。

山岳会役員として2004年から2016年まで監事を歴任されている。

高校時代からの親しい先輩

野田憲一郎

親しい先輩がまた一人逝ってしまいました。岡田博司さん。

1958年法学部卒。わたしが新人の時から指導してもらった2年上の先輩だった。

わたしが山岳部に入ったのも岡田さんの影響が大きい。岡田さんは高校の先輩でもあり、わたしが高校山岳部にいたときに「阪大に通ったら山岳部に入れよ」とさそわれたのがはじまりだ。

山岳部に入ってからも毎週六甲山などのゲレンデで岩登りの手ほどきをしてくださった。今も覚えているのは1956年夏の合宿で劔岳のチンネ中央チムニーを登ったことだ。岡田さんのリードであの大岩壁を登って岩登りに自信がついた。

部は岡田さんが現役の時代以前から黒部川に取り組んでいた。1956年春、後立山から下の廊下を吊り越して横断し立山へ抜けたことや1956年末から翌年にかけての厳冬期赤牛岳登頂などの大きなイベントに岡田さんの役割は大きかった。その後の赤牛岳からの上廊下横断や、積雪期上廊下

の完全トレースという積雪期黒部川開拓のイベントにつながったのだと思う。岡田さんには卒業後も現役の指導に関わっていただいた。優しく、丁寧に指導されたのを覚えている。

近年は対岳館の集まりに参加されることもあった。2017年9月、ゴンドラで八方尾根に登り、一緒に白馬三山の雄大な景色を楽しんだのが最後だった。感謝の思いと共に、ご冥福をお祈りいたします。

大角美佐子 氏

2022年1月1日に亡かれたとの連絡がご遺族からありました。享年82歳。1962年薬学部薬学科卒。現役時代は、故土居さんや横井さんら第2期の女子部員として、合宿等に参加されていた。

編集担当の交代にあたって

前号まで編集を担当していた高田邦雄です。新スタイルの会報誕生、お祝い申し上げます。小生、2000年4月の発刊から前23号まで23年間、編集前号まで編集を担当してきました。この間、トップを飾る記事がなく、会長らに泣きついたりしたことも何度かありましたが、なんとかしのいできました。会員の動きなどを紹介する会報は皆様のご協力あって初めてできあがります。どうかよろしくお願いいたします。

編集後記

2021年11月の理事会で、前任者の高田さんが会報編集の任を降りたいとのことで、後任として理事会で選任されました。

会報のような編集は、学生時代を含めても初めての事でありましたが、以前より会報の編集にあたっては高田さんのほか主に関西在住の理事がかかわることになっており、事務局をはじめとした協力のおかげで、何とかまとめることが出来ました。

会報のスタイルはこれまでの縦3段組から、編集しやすい横2段組へと変更しましたが、如何なものでしょう。